

オブリジェクション167

正義編

岡森 利幸

本編は、次の11項目からなる。(文中敬称略)

- ① 黒人の首をヒザで押さえつけた白人警官
- ② 黒人アニメに差別批判
- ③ トランプ大統領の横暴
- ④ 嫌われ者・花さん
- ⑤ 泣く子は育たない
- ⑥ 河井夫妻の潤沢な選挙資金
- ⑦ ベンチャー企業に入社早々から横領した役員
- ⑧ 架空請求で1億円を振り込んだ70代女性
- ⑨ 本庶氏と小野薬品のこじれた関係
- ⑩ 香川ゲーム条例・パブリックコメントの怪しさ
- ⑪ エネルギー庁決算文書改ざん

文中の会話文には、筆者が推測するフィクションが含まれる。

【1】内は、新聞記事・週刊誌の引用・要約を示す。

① 黒人の首をヒザで押さえつけた白人警官

【読売新聞朝刊 2020/5/29 一面、国際

ミネアポリス、白人警官が組み伏せた黒人の首をヒザで押さえつけ、死亡させた。全米で抗議のデモが激化している。】

【読売新聞朝刊 2020/6/4 国際

黒人男性死亡で全米抗議、デモを隠れみのにした略奪があった。転売できる高価な商品が標的になった。警察車両に火炎瓶を投げ込んで逮捕された2人は弁護士だったが、組織の実態は不明。】

【読売新聞朝刊 2020/6/5 総合

黒人男性死亡で抗議デモ。5月25日、ジョージ・フロイトさん(当時46歳)が白人警官に首をひざで約9分間押さえ付けられ死亡。(デモ鎮圧のために)軍を投入するか否かできしむ米政府。】

【読売新聞朝刊 2020/6/7 国際

ミネアポリス市議会で、警官が容疑者を取り押さえの際、首を圧迫したり抑えけたりすることを禁止する議案を可決した。】

【神奈川新聞朝刊 2020/6/10 総合

警官が容疑者の首を圧迫することを禁止する条例が米各地に拡大した。ミネアポリスでは2015年以降、警官による首の圧迫行為が257回以上あった。うち44回で相手が意識を失っていた。】

【読売新聞朝刊 2020/6/11 総合

黒人男性の死を全米が悼む。故郷で葬儀が行われた。フロイドさんの死去を受けた抗議デモは全米で続いているが、沈静化している。】

【読売新聞朝刊 2020/6/12 総合

米国人男性死亡で、フロイドさんの弟は、兄が20ドルの偽札を使った疑いで通報されたことについて、「兄は危害を加えていなかった。黒人の命の価値は20ドルなのか】

うつぶせに道路に横たわる黒人が首を不自然に曲げていた。その上を白人警官が片膝かたひざでその首筋を抑えつけていたからだ。黒人は「息ができない!」とうめく。

大柄な警官の体重の2分の1以上（体重移動の仕方によつては100%近く）の重さがひざに加わるのだから、身動き取れない。抵抗する容疑者を逮捕するため、警察が行っている型通りの制圧方法だろうが、抑えどころが悪かった。しばらくして動かなくなった。

ぐったりと動かない黒人を見て、異変に気付いた警察は救急車を呼んだが、病院で死亡が確認された。男はジョージ・フロイドさん（46）だ。

膝で圧していた時間は、8分46秒とされている。制圧のためにしては、それは長すぎる時間だ。しかも、すでに男性には後ろ手に手錠が掛けられていたから、必要性があったわけではない。明らかに過剰な行為だった。

警察は、当初、男が連行される際に、警察官に抵抗し、暴れた結果の「突然死」だと説明したが、その様子は街中の防犯カメラなどで撮影されていたから、言い逃れはできない。

道端に停車していた車から、引き釣り出され、偽札を使ったとされるレストランに連れて行かれた様子や、うつぶせに倒れた上に警官がのしかかり、膝で首を押さえつけている様子、ぐったりした男を救急車で運ぶ様子を、カメラで写した映像が公開された。膝で首を押さえつけている様子では、音声付であり、男がうめいている内容も捉えていた。

それらを見た人々は、警察の横暴ぶりに怒り、抗議のデモを繰り広げた。人々の中に主だった先導者がいるわけでもなく、自分たちの自由意思で集まり、大通

りを練り歩く、そしてこぶしを突き上げ、抗議する。大合唱が道路に響き渡る……。

「息ができない！」

「首に乗せた膝をどけてくれ！」

「正義なくして平和があるか！」

「黒人を何だと思ってるんだ！ 黒い命は大事だ

(Black Lives matter)」

などと、叫ぶ。あるいは、それぞれのメッセージを書いたプラカードを掲げて行進する。示威運動を練り広げる。

しかし、彼らの一部は荒れ狂い、警察車両を見れば、ボコボコに叩き壊す、ひっくり返す。火炎瓶を投げつけ、炎上させる。怒りの矛先が、デモを規制しようとする警察に向く。それだけでなく、街に並ぶ商店のシッターやショーウィンドウをぶち壊し、高級商品を略奪する。木片が転がっていれば、集めて火を放つ……。シアトルでは一部地域を自治区として占拠していた例もある。彼らにとって、それらは当然の、正当な行為なのだ。やられたら、やり返せ、という機運に高揚する。暴動という表現が当てはまる。そんな乱暴狼藉は市民にとっては脅威だろう。そんなことをすれば逆に嫌われる、と私は思うが。

（ヤツらは怒りっぽいし、なんて暴力的なんだ！ ぜんぜん好きになれないやつらだよ。その昔、ヤツらにアフリカ大陸から連れてきた連中は、罪作りなヤローだよ。今となつては仕方ないけど）などと愚痴ったりして……。

アメリカでは、被害者の親族の言動が注目され、マスメディアが取材したり、証言台に立つたりする。だいたい彼らは感情をむき出しにし、被害者はいい人だったと言ひ張り、その死を悼み、加害者側をののしることになる。黒人男性の弟は、過激なデモを見て「平和的に行おう」と呼びかけたのは立派だった。偽札を使ったことについて聞かれると、「黒人の命の価値は20ドルなのか」と涙ぐんだ。彼は当然、兄が偽札を使ったとは思っていない。偽札ならば、「黒人の命は0ドルの価値しかないのか」と言うべきところ。

なお、アメリカで盛んに叫ばれている「Black Lives matter」の語句に、私は少々気になっている。色を強調しては、人種を意識させるものだから。それでは、アジア系の人に不満が生じるだろう。彼らはそれに同調（対抗）して「Yellow Lives matter, too」（黄色い命も大切だ）を叫ばなくてはならない。

2020年6月2日の読売新聞の報道では、全米1

40の都市でデモが行われ、逮捕者4100名を出すと
いう騒乱状態となった。トランプ大統領は鎮圧のた
めに軍を出すことを示唆したが、その軍投入には高官
たちがこぞって反対したから、さすがのトランプも矛
を収めた。ともあれ、アメリカ社会を揺るがす大事件
に発展した。

ただし、商品を略奪するやつらは、デモ参加者とは
別の集団だとも考えられている。デモにかこつけた窃
盗団か、暴れたいだけの若者たちかもしれない。

全米での大規模なデモは、黒人たちの強烈な怒りと
パワーを見せ付け、アメリカ社会を揺るがせる。そん
なデモや集会は、歴史的にこれが最初でもないし、最
後にもなりそうもない。人々の間に、差別感情の根強
さがある。そんな対立が深まり、過激になればなるほ
ど、互いの憎悪も大きくなるところがある。それでも
アメリカ経済は繁栄してきたし、人々はやけ食いし
(?) 肥え太る……。

そのきつかけとなった、ジョージ・フロイドさんが
死に至ったときの状況を考察してみよう。ネット情報
などから、ここに再現しよう。

——警察官数人が止まっていた車に近付いた。その
車には三人が乗っていた。レストランの店員の通報に

より警官が駆けつけたが、偽札使いの犯人たちと疑わ
れる三人組はまだ近くにいたのだ。逃げる様子はな
かった。

ドアが開けられ、まもなく、男女二人が車の外に出
た。警官たちの目標は彼らではなかった。最後に運転
席にいた黒人の男が、車から出された。スキンヘッド
で、黒っぽいタンクトップ(ランニングシャツ)姿で、
太い腕を出した大柄な男だ。見るからに屈強そうな男
は、後ろ手に手錠をかけられ、短い間、路傍に座らさ
れていた。まもなく、警官によって立たされ、横断歩
道を歩き、道路の向こう側に連行されていった。ここ
までは男は抗う様子もなく、おとなしく警官の指示
に従っていた。その向こう側に男が不正な20ドル札
を使ったレストランがあり、現場検証に立ち会われ
たのだろう。

そこまで、少々酩酊していた男には、なぜ自分が逮
捕されるのか理解できなかった。薬物をやったことが
疑われたのか、とでも思ったのだろう。(薬物疑惑な
ら、テストキットでシロと証明されるだろうから、ノ
ープロブレムだ)と思っていたかもしれない。

レストラン付近で、こんな会話が交わされたのだろ
う——

警官「オマエが、この20ドル札を使ったことは間違いないな」

男「そうだが……」

警官「レストランで飲み食いして偽札を使うとは、とんでもないヤローだ。店員に偽札をつかませるつもりだったんだろ。店はだいたいうす暗いから、こんなものでだませると思っていたんだろ？」

男「ええ？ オレが偽札を使うわけないよ」

警官「この偽札をどこで作ったんだ？」

男「知らんよ」

ようやく男は、自分が20ドル札を偽造し、使ったことが疑われていることを知った。そして偽造犯として警察署に連れて行かれようとしている。〈このままではオレは犯罪人にされてしまう〉と思うと、叫ばずにはいられなかった。

警官「とぼけるな！ テメーら、黒いやつらがやりそうなことだ！」

男「何かの間違いだ。おそらく、オレが受け取った札の中に紛れ込んでいたんだ」

警官「間違いで済むか？ コノヤロー、下手な言い訳しやがって。テメーらのことだ、どうせあやしい取引をして手に入れたんだろ。署でゆっくり本当のところ

を聞きだしてやる。車に乗れ！」

男「違う。違う。オレは不正をするつもりはなかった。使えるものと思っただ」と、野太い声で否定した。

警察車両に乗ることに後ずさりし、自分の言い分を聞いてもらおうと思っただ。〈白人警官に逆らうことは危険なことだ〉とはわかっていたつもりだが、自分の潔白だけは主張しなかった。

「テメー、おとなしくしろ！ もういい、わめくな！」

「オレの間違いだしたら謝るよ！ オレは真札と思っ
て使っただ」

「まだ言うか、コノヤロー、オレは、おとなしくしろ
と言っただ！」

警官は、後ろ手に手錠された男の背を突き飛ばした。男はよろけて、地面にはいつくばる格好になった。警察車両の裏に隠れるような位置だった。それを見ていたもう一人の警官が、目配せした。それは〈痛い目にあわせてやれ！〉の合図だった。警官は男の背にのしかかり、膝を首筋に当てた。それで男は身動きできなくなった。男はうめき声を上げるだけ……。

警官たちには、少々痛めつけても、この屈強なような男が死ぬようなことはないだろう、と高をくくっていた。首の後ろにひざを乗せていたから、氣道を圧迫

していたわけではなかった。男が大声でうめき声を上げるから、警官はさらにひざに力を入れた。上半身を直立させ、左手をズボンのポケットに入れ、ポーズをとるようにして周囲をにらむ。

男は野太い声でうめき続けた。「ウーアー、息がでない」「ウーアー、プリーズ、プリーズ、殺さないでくれ」「ママー……」

——最後の声は、言葉にならなかった。

その状況から、「本当に息ができないなら、そんな声は出せないのではないか」と思うむきもあるかもしれない。そうであっても、男が苦しんでいたことは明らかだ。男のうめき声は約6分間続いた。その後には動かなくなり、声も発しなくなった。それでも警察官は膝で圧迫し続けた。ようやく、容疑者の異変に気付いたと見える。膝を外したのは、うめき声が絶えてから、3分近く経過していた。

死因として、窒息死ではないことがわかっている。首の動脈が圧迫され、中枢神経への血液の循環が滞ったの心肺停止だろう。

アメリカで、特にミネアポリス市では、警官が容疑者を取り押さえるときに首を圧迫する(chokehold)のは、よくあることだったという。警察の捕縛術として

容認されており、禁止されているわけではなかった。それを改めるには、一人の死を必要とするのだろうか。今まで死の危険があるとはだれも知らなかったことになる。

② 黒人アニメに差別批判

【毎日新聞朝刊 2020/3/26 国際

NHKが黒人描写アニメ動画を削除。米での抗議デモを解説するテレビ番組で放送された、そこで、筋骨隆々のタンクトップ姿の黒人男性の人物像を登場させたことに、「黒人描写に偏見がある」との批判が起きた。】

【毎日新聞朝刊 2020/6/12 金言「お母さんのルール」男性用タンクトップを英語でワイフビーター（妻を殴る人）という。米デトロイトで1947年妻を撲殺した男がタンクトップを着ていた。その後、映画などで暴力的な男性がこのシャツ姿で描かれることが多くなくなり、90年代半ばにワイフビーターという呼び名が定着する。】

【読売新聞朝刊 2020/6/12 総合・社会

黒人アニメ動画で、「差別を助長している」の批判を受けてNHK会長が陳謝した。「描き方がステレオタイプ」との批判もある。路上で拳を振り上げるキャラ

クターが他にも登場するが、全員が黒い肌の人々として描かれていた。」



The Japn News 2020/6/14 の記事より引用

これは、筋骨たくましい黒人が、周囲の黒人たちを扇動するかのようになり、こぶしを突き上げ、訴えている。彼が黒人を代表して、人種差別に抗議している

図柄になっている。その姿の描き方にクレームがついた。それでNHK会長が陳罪する事態になったのだから、「大事件」だろう。

「黒人描写に偏見がある」という指摘が出されたが、なぜこの動画が「人種差別」になるのか、理解に苦しむ人がいるかもしれない。私もそれには首をかしげる。これでは、世界の人々に黒人に対して悪いイメージが持たれてしまうともいうのだろうか。この姿は健康的で、力強さにあふれている。なぜこの姿で描いてはいけないのか。

一つ考えられることは、黒人は弱者の立場にいたるのだが、この姿では「強者」だから、誤解を招くことかもしれない。タンクトップ（ランニングシャツ）姿では、アメリカでは乱暴者のイメージがあるという。そのイメージこそ偏見だろうし、日本で、この放送を見る人々の間では、健康的のイメージのほうがだんぜん強いだろう。好感をもたれるにちがいない。

別の面での心配があるという。この図から、黒人はみな筋骨たくましく、粗野であり、暴力的な抗議運動を行うというイメージが植えつけられる恐れがあるというのだ。乱暴者として受け取られてしまうこと。抗議デモは一種の圧力であり、威嚇的でもある。

世界では、黒人を漫画やイラストや描くと、常にとこからか文句が出ることになっている。これまでにも、黒人の特徴をデフォルメした画像や商品などに対して、批判が出た。デフォルメすると、「からかう・あざける」意味にとられてしまうようだ。

手塚治虫の漫画に登場する黒人の描き方に強いクレームが出ていた。黒人少年が下僕として働く姿などが気に入らないらしい。

今回のNHKテレビ番組「世界のいま」で放送されたアニメでも、例外ではなかった。この番組は、時事問題を、子どもでも理解できるように、やさしく解説する番組であり、大人にも参考になる内容を放送している。

それ自体が差別したり、愚弄するわけでもないにして、「人種差別の助長になる」という言い分がある。

その特徴が固定的な観念になり「偏見」になるといふ。

ステレオタイプという批判もある。(一つの事例で集団全体をそれとみなすように一般化するな)という意見がある。この批判は、黒人はこの絵にあるような人ばかりではない、多様なんだ、これでは固定的観念を植え付けてしまう、という恐れがある。黒人すべてがこのように筋肉ムキムキでタンクトップを着ている

と思つたら「大間違いだ」という主張になる。

一人の人物像で、人種の集団を代表させて表現することの難しさがある。どうしてもステレオタイプになるし、そうせざるをえない。(ステレオタイプで描くな)と言う側に無理がある。一人や二人の人物を描く場合、その集団の特徴をいくつか盛り込まざるを得ない。

逆に、全然黒人らしくない、何の特徴もない描き方をしたならば、「正しく書けよ」と叱られるだろう。

「これが黒人？ ウソだろう。全然違うよ」という不満の声が上がるだろう。

例えば、日本人を表現するのに、背が低く、貧相で、めがねをかけ、出っ歯で、黒い髪をなでつけた、黄色い肌の人物像に描かれたら、われわれは文句のひとつを言いたくなるけれど、日本人1億数千万人のうちにはそんな男がいると思えばいいことだろう。(うーん、日本人の特徴をよくとらえている)と感心したりして。

NHK会長は、番組の内容に対して、だれか(特に政府高官、名のある外国人)が怒って文句を言ったり、抗議したりすると、すぐに頭を下げて謝る習性があるようだ。「これでいいんだ。事実を伝えたんだ」とい

う信念を持ちたいし、NHKスタッフをかばうぐらいのことをするべきだろう。文句を言う人には、ランニングシャツの男を指し示して「キミらの中に、こういう男が一人や二人いるだろうか?」と言つてやればいい。

次週の放送で、6月14日のNHKテレビ番組「世界のいま」の冒頭では、かなりの時間を割き、アナウンサーがNHKを代表するかのようになり、この件について平身低頭して謝罪していた。彼はかわいそうならぬに悲壮な顔をして……。配慮が足らなかつた」というのが主な言い訳だつた。

視聴者の中には、「あの放送を見て誰かが怒つたわけね、NHKは怒られたから謝っている。黒人を表現するって、怖いねえ。へたに表現すると、日本でも騒ぎ立てられ、バッシングされてしまうのね」と思った人がいるだろう。

この放送を見ていた子供たちにとっては、アメリカでの黒人と白人の対立の構造をアニメで分かりやすく解説したことで、教育効果が大きかつたにちがいない。偏見が植え付けられたとは、私にはとても思えない。

③ トランプ大統領の横暴

【毎日新聞朝刊 2019/2/18 一面
トランプ氏、壁建設へ非常事態宣言。
野党「職権乱用だ」】

【毎日新聞夕刊 2019/2/26 総合

前FRB議長イエレン氏が、異例の大統領批判。「トランプ氏に、FRBの政策の理解力が欠如している」と断じた。イエレン氏はオバマ前政権下の2014年に就任したが、トランプ氏が再任しなかつた自らが指名したパウエル現議長の解任も検討したとされる。】

【毎日新聞夕刊 2019/2/28 総合

コーエン被告が公聴会で2016年大統領選のトランプ陣営に関する証言をした。口止め料はトランプ氏の指示によるとし、小切手コピーを提出した。】

【毎日新聞夕刊 2019/4/9 総合

トランプ氏人事で、大統領警護隊長官が退任する。ニールセン氏がトランプ氏の出入国窓口の閉鎖指示に反対した。】

【毎日新聞夕刊 2019/7/11 国際

トランプ政権を酷評したダロック駐米大使が辞任した。トランプ氏はダロック氏に対し「非常に愚かなやつだ」と怒りをあらわにしていた。】

【毎日新聞夕刊 2019/10/1 総合】

ボルトン氏「北朝鮮の核放棄ない」「北朝鮮の体制転覆や米国の軍事力行使について真剣な議論の必要がある」と述べるなど、トランプ政権の方針と食い違う立場を展開した。(ボルトン氏は2019年9月10日に大統領補佐官の職を解任された)】

【毎日新聞朝刊 2019/11/19 国際】

トランプ氏また利益相反? 来年G7サミットの開催地に親族経営施設で。】

【毎日新聞夕刊 2020/2/8 一面】

米弾劾追訴で証言した陸軍中佐が解任された。トランプ氏に逆らって証言したことへの報復とみられる。】

【毎日新聞朝刊 2020/2/9 国際】

トランプ氏、公聴会証言の2氏を解任、報復か。】

【毎日新聞朝刊 2020/2/14 国際】

トランプ氏、「盟友」の求刑が「重すぎる」として軽い刑を求める方針を明らかにした。政権による裁判所への露骨な介入に批判の声が上がっている。】

【毎日新聞朝刊 2020/2/21 国際】

トランプ氏側がアサンジ被告に恩赦を示唆、「露疑惑否定すれば……」。

トランプ氏は国務次官ルード氏を「解任」した。ルー

ド氏は、ウクライナ疑惑にあるトランプ氏の主要な外交政策に否定的だった。】

【毎日新聞夕刊 2020/2/15 総合】

米大統領、元側近プリン被告の捜査に新検事を任命した。】

【毎日新聞朝刊 2020/4/6 国際】

トランプ氏、また報復人事。ウクライナ疑惑で内部監察官を解任へ。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/17 国際】

アメリカがWHO(世界保健機構)への出金を停止する。世界から懸念の声。】

【読売新聞朝刊 2020/6/11 総合】

トランプ氏は、黒人男性死亡の抗議活動への対応でトランプ氏が軍の投入も辞さないとしたことに異を唱えたエスパー国防長官の解任を一時検討したが、解任に否定的な高官たちの意見が相次ぎ、方針を転換した。】

【読売新聞朝刊 2020/6/22 国際】

米トランプ政権は6月20日、トランプ大統領の側近らへの捜査を率いてきたニューヨーク州のジェフリー・バーマン連邦検事を解任した。バーマン氏は2018年1月に連邦検事に就任し、トランプ氏の個人弁

護士ルドルフ・ジュリアーニ元ニューヨーク市長の知人でウクライナ疑惑に関与したとされる実業家2人の訴追などにかかわった。】

アメリカ大統領・トランプ氏の数々の言動で、アメリカの「大統領制」に疑問を持つ。その権限が多岐にわたるし、強すぎると思えるのだ。アメリカでも、他の独裁国家と同様に、一人の人物に権力を集中させている弊害が現れている。

不動産業で財を成してきたトランプ家、政治権力と結びついて、ますます好調だ。行政上の業務を割り振り、自分の家業や親族の利益誘導を図ることに、少々眼をつぶるにしても、「おまえはクビだ」が目だつて多いから、見過ごせない。

アメリカの大統領制は、トランプ氏が独断と専横の政治をするのに都合の良い仕組みになっている。人事権をもつことが、一番の強みになっている。人事権を振り回し、自分の気に入らない者や、意見の相違のある者を首にする。前述の記事群は、私が近年の報道で(2019年2月から)目にしたものを拾い出したものだが、何人を解任したか、あるいは辞任に追いやったか、数え切れない。

解任するためには、それなりの公的な理由がなければならぬと私は思うが、「大統領の意思決定」が理由であれば、すべて通用するようだ。解任が不当だという裁判に発展することもない。

ただし、解任された人が多いことは、対立しようとかまわず、あえて自分の考えを述べたり、証言したりする「心意気」を持っていることだ。そんな人がアメリカには多いのは、好感が持てる。日本ではどうだろうか。裏のほうで陰口をたたく程度の人ばかりだろう。

人事権の乱用以外では、2019年2月に大統領がメキシコとの国境の壁建設で非常事態宣言を出し、強引に押し進めた。野党側はそれに文句をいうことしか出来なかつた。今年4月に、コロナ対策でWHO(世界保健機構)のやり方に不満を持ち、それへの拠出金を止めるといふは、今日の情勢ではほとんど暴挙だろう。脅迫的でもある。アメリカ第一というより、自己中心的な考え方を押し通そうとするものだろう。

④ 嫌われ者・花さん

【朝日新聞朝刊 2020/5/3 社会
ネットに渦巻く「自分の正義」、他人の弱点などを攻

撃して達成感を得る人々がいる。作家・雨宮処凛さん（45）「誰かをバッシングすることで達成感が持てる。自分の正義を確立しようとする」】

【読売新聞朝刊 2020/5/25 社会

女子プロレスラー木村花さん（22）5月23日に死亡。死の直前、インスタグラムに「ごめんね」を投稿。木村さんへのSNSや番組の公式インスタグラムに「出て行ってくれ、頼むから」「もう人前に現れるなよ」など中傷する書き込みが複数されていた。】

【読売新聞朝刊 2020/5/27 社会

テラハ出演の木村さん死亡、SNS中傷でまた悲劇。「自分のことしか考えない」「気持ち悪い」「早く消えてよ」など毎日100件で、傷ついた。韓国では、ソルリさん、ク・ハラさんなど（同様に自殺した）】

【読売新聞朝刊 2020/5/30 社会

フジテレビがテラハ番組の放送を打ち切る。】

【毎日新聞朝刊 2020/6/19 くらしナビ

ネット中傷の対策として、実効性ある規制を（求める）。SNSの管理者やプロバイダー（通信会社）に、相手の氏名などの開示を請求する。任意で応じない場合は、現状では裁判が必要。】

【毎日新聞朝刊 2020/7/4 総合

〈テラスハウス〉の番組出演者に誓約書。制作側が、演出を含む撮影方針に従わせる誓約書を出演者と交わっていたことが、3日の定例記者会見でフジテレビが明らかにした。誓約に違反して製作に影響が出た場合、1話分の制作費の損害賠償を負うという内容が盛り込まれていた。】

【毎日新聞朝刊 2020/7/5 社会

花さんの母「娘はスタッフにあおられていた。ピンタをしろと言われたが、帽子をはいたいた】

1. 女子プロレスラーの死

「あなたたちが望むように、私はリングを降りる」

木村花さん（22）は死を選んだ。そうとうな覚悟と準備の要る自殺方法だった。不特定多数から罵詈雑言を浴びたことが、痛打となった。SNSの見えない相手（匿名者）によってオール負けしてしまった。オール負けというより、負けを認めての「ギブアップ」かもしれない。

かれらの言い方が辛らつだった。完全に相手を見下しているのが特徴だ。いやみたつぷりに、罵倒する。かれらは書き慣れている、と私は推察する。

世間さまになじられては、生きにくい。世間の目を

気にする日本人特有の心理なのかもしれない。自分が槍玉に上がり、ごうごうと非難されている状態は、針のむしろに座らされているようなものだろう。言い訳でもしようものなら、さらに怒りをかけてしまう。

隣国、韓国でも同様のことが起きて、問題になっていた。この点で日本と韓国は、国民性がよく似ている。ソルリさん、ク・ハラさんが、それぞれ事情は異なるにせよ、似たような経緯で昨年2019年に自殺した。不特定多数に非難され、いじめられたのだ。死んでお詫びをするしかなかったようだ。美人薄命になってしまった。

木村花さんは女子プロレスラーだった。その世界での悪役の存在は知られていることであり、花さんも悪役になれればよかったとする意見がある。しかしながら、リング上で悪役に徹することは出来たとしても、私生活で悪役になることは、人格否定されることであり、耐え難いことだろう。

SNS（ソーシャルネットワークシステム、通信アプリ）で、木村さんは、恰好の標的となり、容赦ない罵詈雑言を浴びた。投稿するものはみな、正義の仮面をつけ、正義の鉄槌を振りおろす気でいたのだろう。実態は、正義どころか、悪意に満ちあふれた言葉を投

げつけている。SNSは、人々の攻撃性をむき出しにするのに好適なようだ。それはもう、大多数対一の、誹謗中傷の集中攻撃だ。集団ハラスメントになっている。

SNSでは匿名で投稿できることが問題の一つとされる。SNSでは中傷を規制するため、発信者の特定を容易にする動きがようやく起きています。

2. テレビ出演

木村花さんはなかなかの美貌の持ち主だ。父はインドネシア人であり、いわゆるハーフだ。しかし、父の姿は見えない。結婚には周囲の反対があつて、花さんが生まれてすぐ、両親は離婚したとのこと。プロレスラーだった母に付き、一人で遊んでいたような少女時代をすごしていたという。子どもの世界では、ハーフの子をなかなか受け入れない。花さんは、プロレスラー以外には自分は向かない、と思い込んでプロレスラーになったという。

しかし、彼女にはタレント性であり、徐々に注目されてきた。フジテレビで深夜に放送されていたリアリティ番組「テラスハウス東京」に出演していた。テラスハウスとは集合住宅の一種で、長屋のことだ。その番組は「テラハ」と略称される。

私は見たことがないが、テラスハウスでの若者たち6人の共同生活ぶりがドキュメンタリー風にアレンジされていたものだ。現実に起きた出来事などを土台にストーリー展開するのだが、番組制作では、視聴者の興味深いところだけを取り上げるのだろう。

出演者たちは、実生活の延長か、虚構的なものか、区別しにくかったはずだ。つまり、視聴者側も、それを混同しているところがあり、虚構ではなく、実際の生活で起きたことだろうと思ひ込みやすい。

3. コスチューム事件

テラスハウス東京38話で、木村花さんが激怒したシーンがあった。

花さんが試合用のコスチューム（上下つなぎになっている派手な服）を洗濯機の中に入れておいたところ、共同使用者の男・小林が自分の衣服を入れ、一緒に洗濯機を回してしまったために、コスチュームが縮んでしまい、着られなくなった。コスチュームはその一着しかもっていないし、新規に作るにしても10万円かかるのだ。コスチュームは、洗剤を用いてはならず、水洗いするべきだったらしい。小林は親切にいっしょに洗濯したが、それを知らなかった可能性がある。

小林は「洗濯機にコスチュームが入っていたのを知

らなかつた」と言い訳した。コスチュームはかさのある大きなもので、かなり目立つものだから、彼が見落としたとは考えられない。「親切心を起こして洗ってあげた」とは言えなかつたのだろう。それでは余計なことをしたことになるからだろうし、そんな親切心など、花さんには隠しておきたかつたか……。

花さんは男を男とは思わない勢いで、小林を怒鳴りまくつた。小林の帽子を叩き落としたシーンは圧巻だつた。

「自分はふらふら過ごしてわかんないよね、死に物狂いで頑張ってお金稼いでいる人の気持ちなんてわかんないよね」と、陰険な言い方をして相手をなじつた。単にヒステリックな感情だけでは、こうは言えない。彼女が所属するプロレス団体の先輩あたりに、日ごろ言われていた口調をまねたものかもしれない、と私は思つたりする。

小林は意気消沈し、テラスハウスを出て行く。そのときのインタビューで、花さんの落ち度を一切指摘せず、「どっちが悪いって考えても無駄だし、とりあえず自分が悪いと思つてる」と殊勝なコメントをした。金をためてから10万円を返してゆくといい。これには視聴者の同情が集まるわけだ。

大事なコスチュームを共用の洗濯機に入れておくことが、そもそも悪いという見方が出ていた。タライのようなものに水に漬けておくべきものだったのだから。いい人・小林を追い出したオニ、女・木村花さんに風当たりが強くなる。

この一件だけじゃないだろう。別のテレビ番組で見た花さんの態度にも問題があったらしい。

4、誹謗中傷の嵐

テラハは比較的人気のあるテレビ番組だったから、大勢の人がSNS上で声を上げた。木村さんを嫌う人が次々に声を上げた。激怒した木村花さんをヒステリックゴリラなどと呼んだ。彼らは、いやみったらしいメッセージを書いて投稿する。それらは公開されるものだから、一人がそんな文章を書くと、皆がこぞって書くようなところがある。それに共感したということか。寄つてたかつていじめ抜く。

「おまえが早くいなくなればみんな幸せなのにな。まじで早く消えてくれよ。」

彼らは、悪者を攻撃することを正義だと思っている。自分の気に入らない者は悪者だ。排除しなければならぬと思つている。そんな場合、直接的に「早く死んでくれ」とは言わないが、「早く消えてくれ」という

陰險な表現を多用するのが特徴だ。

5. 木村花さんの返信

これでは、いいたまれない。花さんは「こんな社会には自分はない」と思つたことだろう。

花さんがそんな投稿者に返信するかのようにな、上の文言をインスタのストーリーに投稿したという。

この最後の行にある成句は儀礼的なものだろう。

生きていてごめんなさい。
良い人じゃなくてごめんなさい。
嫌な気持ちにさせてごめんなさい。
消えてなくなったら許してくれますか？
どうやったら消えられますか？
消えたらみんなに愛してもらえますか？
私はみんなのことが好きです。

「お前らなんて、大嫌いだ！」というのが、木村花さんの本当の気持ちだろう。でも、その叫ばなかった。叫ばなかった。自分の気持ち

を偽ることがベストだと考えたのだから。自分に正直であつては、人をまた傷つける……。嫌われ者の花さんだったが、〈誰にでも愛されたかった〉と私は読む。小林は嫌つてはいなかったようだけど。

木村花さんの死が知られると、いやみなメッセージは投稿者自身によって次々と削除され始めたという。彼らは少しは反省したようだ。あるいは、花さんの死で潮目が変わったから、そんなメッセージに対する逆攻撃が始まるかもしれないから、さっさと消してしまおう。

6. 誓約書

7月になって、後日談のような事実が明らかにになった。記者たちに問い詰められたらしく、フジテレビが、テラハの出演者から誓約書を取っていたことを明かした。それは〈出演者は製作スタッフの方針に従え!〉というものだ。〈方針にそむいたら、1話分の制作費で損害賠償しろ!〉という脅し文句までついていた。スタッフが細かな〈演技指導をしていた〉事実が浮かび上がる。要は、テラハはドキュメンタリーのようなものではなく〈やらせ番組〉だったというのだ。フジテレビが早々に番組を打ち切った理由が分かるというものだ。

スタッフの花さんに〈オニ女〉の役割をさせていたことが、浮かび上がる。

花さんが余計な洗濯によってコスチュームを台無しにされたシーンで、スタッフ(実質的な演出者)は「小林に思いつきりピンタを食らわせろ!」と指示したが、

花さんは手加減して、帽子を叩き落とすだけにした。小林を張り倒すことはできなかった。

指示に従わなかったから、そのスタッフは花さんを怒鳴りまくったことだろう。「花あー、オレはピンタしろと言ったじゃないか、聞こえなかったのか、テーマはもういい。出演料カットする!」

「……」

「謝りもしないんか!、どしろうとめ!」

「しろうとで、ごめんなさい」

花さんは、〈オニ女〉の役は務まらなかった。母親などには、もうテラハには出演したくないと言い出していた。スタッフが〈オニ男〉の役を演じればよかったのかもしれない。

⑤ 泣く子は育たない

【毎日新聞朝刊 2020/6/25 社会】

東京・町田市で2歳男児殺害の容疑で母親・武田華佳(31)を逮捕。男児は「本を読んで」とせがんで泣き始めた。「泣き止まず、布団を巻いた」ことで、窒息死したとみられる。容疑者が「泣き止まない」と近所迷惑になると思い、以前にも何度か息子に布団を巻きつけた」と供述している。「近所に息子の泣き声が聞こ

えるのが気になって……】

【毎日新聞夕刊 2020/6/26 憂楽帳 「泣き声」佐藤敬一
これまで沖繩戦の取材が続けてきたが、米軍に見つか
らないように、泣き声を上げる赤ん坊の口を親が押さ
えたり、騒ぐ子どもを日本兵が銃で撃ったりしたとい
う話を何度聞いただろう。ある男性は、幼児らを連れ
て家族がガマに入ろうとしたが、日本兵に銃を突きつ
けられたので「母親は幼い弟と妹を山に置き去りにし
た」と話した。(彼はガマに入れたから、生き延びた)】

幼児の泣き声を気にする母親が、布団で巻いてしば
らく放置していたところ、窒息させてしまった事件
(事故)が町田市であった。この辺は家が密集して建
てられているから、物音が近所にもよく聞こえてしま
うと推測される。

子どもが泣いていると、昨今では、「親が虐待して
いるのではないか」と疑われ、警察や児童相談所に通
報されてしまうことがある。その泣き方で、虐待され
たために泣いているのか、単に泣きたいから泣いてい
るのか、普通は区別できるだろうが……。

単に「うるさい」からと、文句を言いにくる隣人も
いるかもしれない。あるいは、泣き止まずことなど簡

単に出来る、と思つて、母親の無策にイラついてくる
のかもしれない。

母親は、いずれにせよ、近所に気兼ねしたのだ。泣
く子を黙らせる方法は、簡単ではない。その難しさは、
実際に子育てしなければ、分からないことだろう。幼
い子どもは、一度泣き出したら、疲れ果てるまで泣き
止まないことが多いのだ。親としては一番困ることだ
ろう。

この母親は一つの方法を考えた。それは布団巻きに
することだった。それによって泣き声が外に漏れない。
泣き止んだら、解いてやればいい。今回、そうしてや
ったところ、男児は息をしていなかった。

警察の事情聴取で「布団巻きにしていた」と言った
から、即逮捕になったわけだ。それでは虐待だ、と誰
もが思うことだろう。でも、私は単に事故だと思ふ。

この件で、連想するのが沖繩戦のことだ。母親たち
が泣く子を無理やり黙らせたという話がいくつか伝え
られている。その関連記事(コラム記事「憂楽帳」)
を前に掲げた。その親族の悲痛さがしのばれる。

⑥ 河井夫妻の潤沢な選挙資金

【毎日新聞夕刊 2020/1/15 社会

広島地検が、河井前法相夫妻事務所を捜索した。案里氏の公選法違反疑惑。車上運動員に対し、上限を超えた金額を支払った疑いがある。】

【毎日新聞朝刊 2020/1/15 社会】

河井案里議員の陣営が日当領収書も「限度内」に偽造か。「人件費」の費目でも領収書を作っていた。】

【読売新聞朝刊 2020/6/19 総合、社会】

安倍首相と菅官房長官は克行容疑者と近い関係であり、参院選では案里容疑者を全面的に支援した。先の参院選で首相の意を受けた党幹部は県連の反発を押し切り、溝手顕正・元防災相に加え、案里容疑者の擁立を決定。首相は案里陣営に自らの秘書たちを送り込んだ。菅氏も応援に2回広島に入った。二階幹事長は資金援助の使途を「広報紙の配布費用」と指摘し、買収容疑との関連を否定した。

検察が捜査を拡大したのは検察トップの稲田伸夫検事総長の積極姿勢もあつたとされる。検察関係者「政界に絡む捜査にも厳正に臨む姿勢を示した」

2019年3月、案里は、東京・永田町で自民党幹事長の二階俊博から激励された。「(公認は)2人目なので、頑張らなければならぬよ」

次の日、擁立が発表され、溝手派の地元議員らに衝撃

が走った。溝手は自民党が下野していた際、安倍を「過去の人」と揶揄していた。

党本部からの資金援助で、物量作戦を克行が仕切った。有権者宅への自動音声の電話が少なくとも2回、ピラ(広報紙)配りを4、5回行なった。それまでの選挙では節約に徹していた克行が、ガソリン代名目で約10万円を後援会幹部に渡すなどした。その変貌ぶりに周囲は驚いたという。】

【毎日新聞朝刊 2020/6/19 クローズアップ】

買収資金の原資が不明。克行議員が突然、選挙事務所や関係者の自宅を1人で訪問し、意見交換もほとんどされず現金入りの封筒を渡して立ち去るケースが多かった。県連からの選挙支援を受けられない夫婦は、地方議員らに幅広く現金を渡したとされる。

県連関係者は党本部サイドから「これは総理案件だから」と説明されたという。党幹部「官邸の意向」。党本部は「2人当選」を大儀としたが、ある県連関係者は「首相が自分に批判的な溝手氏を落としたいだけ」と言い、県連は関係団体に案里議員を支持しないよう示唆したという。】

【神奈川新聞朝刊 2020/6/19 社会】

政府は1月31日、官邸に近いとされる黒川弘務・東

京高検検事長（当時）の定年延長を閣議決定した。そんな中でも捜査の勢いは止まらなかつた。3月3日にはハードルが高いとされてきた議員会館の事務所捜索に乗り出した。検察の体制も異例づくめだった。幹部「稲田伸夫検事総長の後押し」があり、特捜部から広島地権に多くの検事を投入、東京・霞ヶ関の最高検が実質的に指揮を執った。

2019年7月の参院選で安倍首相が河井案里容疑者の街頭応援演説に駆けつけた】

【毎日新聞朝刊 2020/6/21 社会】

投票票日直後の7月末に陣営の資金が底を突き、未払い金が約3500万円あったことが、陣営関係者への取材でわかつた。党本部から資金提供された1億5000万円は使い切つたとみられる。

克行氏のパワハラでスタッフが離反。克行氏は大臣警護の警察官の前では静かだが、警護が離れた途端に態度が変わるといふ。たとえば、広島空港で事務所のスタッフに「このサンドイッチにミルクティーの量が大きすぎるだろ」「歯を見せて笑うな」と叱責した。このスタッフには約束された給料が支払われず、1カ月後に事務所を去つた。LINEでも「返事が無い」「報告をするべきだろう」など、厳しい言葉を繰り返した。

克行議員は細かいことが気になる性格で、ある陣営関係者は「いつ怒り出すか分からず、皆がびくびくしていた」これまでに数十人のスタッフが陣営を離れたといふ、経験豊富な支援者は少なかつた。人材不足だった。車上運動員の確保も難航し、法廷上限額の倍に当たる日当3万円を約束して何とか集めた。運転手が道を間違えると「コノヤロー！」と蹴りを入れた。地元のタクシー会社の幹部「議員の態度が悪くて、どんな運転手でも3日持たない。最後は派遣する人がいなくなつた」

克行氏は33歳で衆院議員に転進したが、この時期から秘書をどう喝するなど悪評が広まり始めた。】

【読売新聞朝刊 2020/6/23 一面】

7月の参院選の1〜2カ月前、後援会関係者は克行容疑者から白い封筒を受け取つた際、「『案里をよろしく』とポスターを10〜15枚渡された」と証言。「貼るのに車で移動するからガソリン代に」と言われた。】

【週刊文春 2020年6月25日号 「河井捜査を妨害」安倍VS特捜検察、暗闘230日

5月22日の夜、広島地検の幹部「官邸が圧力をかけて、河井夫妻の捜査をやめさせようとしている」

自民党関係者「参院選で、党本部から陣営の投入され

るのは一千五百万円が基本。しかし案里氏には3カ月で計一億五千万円と、約十倍もの大金が振り込まれていた。これだけの大金を動かしたのは、党総裁である安倍首相マターだったから。結果的にこの金を買収原資になった」

首相周辺者「溝手氏は2007年の自民党参院選惨敗を受けて、『首相本人の責任』と厳しく批判した。その後も溝手氏の首相批判は止まらず、影で学歴を馬鹿にしたり、持病を揶揄したり言いたい放題。そんなオフレコ発言が安倍首相の耳に入った」

安倍首相は克行氏を取り立てたが、彼には悪評がつきまとった。官邸関係者「セクハラ、パワハラ、秘書への暴力も有名で、官邸内では『あんな奴を取り立てて大丈夫か』と当初から危惧する声も多かった」

元・克行氏の秘書「私は昨春ごろから勝行氏の運転手を勤めました（タクシー会社から運転手が派遣されなかったため）、地獄でした。ブレーキの踏み方、ナビの尺度一つにも克行氏のルールがあつて、守らないと怒鳴られる。移動中、克行氏に、何でもいいからおにぎりを買ってくるように言われ、シーチキンマヨネーズのおにぎりを渡したとき、なぜか「こんなも食いモンじゃない！」と投げつけてきた。足元に転がった

のを『食べ！』って」、後部座席から肘を蹴られたり、頭を平手打ちされたりと、克行氏の暴力は日常茶飯事だった。だが、「案里氏が一緒の時だけは違った。克行氏は『アンリさん』と言つて、ずっとベタベタしていた」】

選挙の買収事件では、だいたい秘書が責任をとるものであり、政治家自身には捜査が及ばないものだが、今回は、ともに国会議員の夫婦が逮捕された。河井克行氏（57）と河井案里氏（46）だ。

検察ががんばったのは、稲田伸夫検事総長の存在が大きいとされる。稲田伸夫氏は男を上げたことになる（政権にはにらまれるけれど）。もしも、検事総長が、政権幹部への追及が甘かった黒川弘務・元東京高検検事長であったなら、こうはならなかったらう。

2019年7月の参院選で、安倍首相と菅義偉官房長官は河井案里候補を強力にバックアップした。同じ選挙区でもう一人の公認候補・溝手顕正氏がいたのに……。自民党本部が同じ選挙区に2人の候補をたて、二人とも当選できるという算段で選挙戦を進めたことになっていたが、より重点を置いたのは、河井案里氏の方だろう。彼らは広島に入り、応援演説し、河合杏

里を熱烈に持ち上げていたのだから、特に目にかけていたことになる。果たして、その選挙区では案里氏が当選し、溝手氏は落ちた。溝手氏の強固な地盤が切り崩されたのは、党本部と県連の力の差が現れたのだから。

定員2の広島県区で、二人の自民党員を擁立するのは、だいたいの無理なことだった。これをゴリ押ししたのは、安倍首相だろう。安倍首相は、その候補者の現職・溝手顕正氏に私憤を抱いていたとされる。溝手氏は安倍氏に批判的な言葉を繰り返していた。自民党県連や本部が、現職の強みを優先し、早々に公認を溝手氏に決めたときには、「気に入らんが、しかたないな。アイツのほかに当選できそうなヤツがないから……」としぶしぶ認めたのだろう。

そんな時、有力な新人がいるとのうわさが首相の耳に入る。参院選が迫ってきた3月、首相官邸に河井氏を呼びつけて、

——「おい河井くん、キミの選挙区は広島だったね。キミの妻もなかなか見どころがあるね、今は県会議員だというが、もっと上を目指しているそうじゃないか。どうだい、今度の参院選に出てみる気はないかね？」

「おおありですよ。でも準備が出来ていない」

「よし、やってみるか。準備には協力するよ。広島県区で二人とも当選すれば、最高だ。一人でもうれしいんだけどね」などと、二人で話したことだろう。あるいは、そばに菅官房長官がいたかもしれない。

この選挙で、河井案里陣営は、多くの金を使った。そのひとつが、車上運動員に公選法で規定された以上の金額を支払ったことだ。その増額分を巧妙に隠す手口が用いられた。名目を分けて領収証を発行することは、稚拙なやり方だったかもしれない。多少の割り増しは、司法に容認されるといわれている。車上運動員には御礼の意味がこめられると思えば、めくじらを立てるほどのものでもない。

しかし、地元の有力者約100人にそれぞれ数十万〜百万円もの現金を渡していたことがばれたことは、ぜんぜん容認されないだろう。票の取りまとめを依頼した意味になる。夫の河井克行氏が主導し、秘書たちを動員し、組織的な行っていた疑いがある。河井克行氏自身が有力者の家に訪れ、寄付などの名目で金を手渡していた事実がある。寄付なら、領収書を書くものだが、それもしていない。領収書を書いたら、「寄付」としてみなされたかもしれない。特に多かったのは地方議員や首長だ。彼らは自身の下部組織を持っており、

組織票を動かす力を持っているものだろう。克行氏は組織のトップを狙い撃ちしたわけだ。選挙をよく知る議員同士だと、カネの話が通じやすかったのかもしれない。そして、余りにも派手にばら撒きすぎたものだから、司法がかぎつけてしまった。溝手派の切り崩しのために、溝手氏に近い議員にも金を配ろうとしたことが、司法に伝えられたともいわれている。

その金でどれだけ票が動くものか、わからないが、案里氏が当選したのを見ると、この地方では、現ナマの効果が大きいかもしれない。「潤沢な金があれば、選挙で優位に戦える」というセオリーを裏付けたことかもしれない。人々は金と力のある方になびく。

彼らはバカップルと言われてしまいそうだが、単なるバカップルではなく、政治に対して「志こころざし」を持つているところは良しとしたい。しかしこれでは、彼らは、指導する側の人たちのメンツをつぶしてしまうことになる。克行氏はどうしても妻を国会議員にしたかったようだ。克行氏のその熱意は並々ならぬものを感じられる。妻が県会議員では不満であり『対等の関係』にしたかったのだろうか。「オレのおかげでおまえは国会議員になれたんだぞ」と恩に着せたかった？ 案里氏の政界へ進出する意欲もそうとうなものだろう。妻

には頭が上がらない克行氏が、妻の要望にこたえようと、必死に奔走したのかもしれない。

バカップルには、子どもはない。少子化を憂える自民党の議員なら、率先して子作りすべきところだろう。彼らは一応エリートだ。しかし、子どもを産み育てることを避けてきたと伝えられる。特に、案里が育った家庭では、家族の不仲が深刻だったたら、「子どもは要らない」と思うようになったという。彼らとともに大学院を出てから、政治活動に熱心に取り組むようになった。憶測で言えば、彼らの結婚はともに政治家を目指すことで意気投合したからかも知れない。似たもの同士（同志）なのだ。

自民党本部は、河井案里氏に総額1億5000万円の選挙資金を出している。河合氏の妻に対して特別な配慮をしたことになる。並の候補の10倍の金額というから、異例の高額資金をもらっていたことになる。特定の者にそんなに資金を出したら、不公平感が広がるだろうから、党本部では内密にされていた情報だろうが、週刊文春がみごとに暴いた。

高額な選挙資金を自民党本部が出したのは、首相（自民党総裁でもある）と官房長官という幹部たちによる強い後押し、指示があったからだと考えられる。

彼らにとって「お友だち」の一人として、重点を置いたのだろう。河合氏は特に普義偉官房長官に近い人物だ。河合氏の妻を当選させれば、「お友だち」がまた増えると考えたのだろう。

この資金が、一連の「買収」のために使われていた可能性がある。河井夫妻としては、選挙のためにもらった金だから、気前よくばら撒いてしまおう、と考えたわけだろう。もしも自分の金なら、こう安易にはばら撒けない。つまり、自民党本部から支給された潤沢な資金が、選挙違反をそそのかしたことになる。克行氏は、受け取りを渋る人に対して「安倍首相からです」と説得した例も証言されている。

選挙には金がかかると言われているが、案里候補の選挙は、1億5000万円を使っても、また足りなかった状況だった。選挙戦に出遅れた焦りが、河井夫妻をばら撒きに走らせたわけだろう。溝手顕正氏が引退するのを待てばよかった、と思えるところだが……。

河井克行氏の秘書が次々と辞めてしまっている。お金をばら撒くのは、この世界では秘書の仕事のはずだが、克行氏は自分で渡していた。彼には信頼できる秘書がいなかったことになる。克行氏には、部下に対してパワハラの性癖があったとされる。そのために秘書

が離反したり、運動員が一度務めると、二度とやろうとしなかったという。克行氏の気分を損ねた場合、殴る蹴るの暴力を振るわれた、という証言もある。これまで事件にならなかつたのが不思議なぐらいだ。個別に被害を訴えても、もみ消されていたようだ。克行氏にはパワハラ・セクハラ・秘書泣かせの悪評があったことについて、官邸のほうにも伝わっていたはずだが、彼らは聞こえないふりをしていたのだろう。「あんな奴を取り立てて大丈夫か」という危惧が、現実になつてしまった。

記事の中に、運転手をしていた元秘書の話として、シーチキンマヨネーズのおにぎりに関して言えば、安価な商品だが、人によって好き嫌いはつきり分かれるものだ。その際に、克行氏は「何でもいいから……」と言って購入を指示した手前、嫌いなものであっても、我慢して食べるべきだったろう。ちなみに、私も嫌いなほうだ。彼とは性格は似ていないと思いたいけれど。

選挙陣営に人が集まらないから、運動員などに報酬をはずむ必要があったのだろう。とうとう、車上運動員への不正報酬がきっかけとなり、大掛かりな買収工作がばれてしまった。自業自得と言うべきか。

⑦ ベンチャー企業に入社早々から横領した役員

【毎日新聞朝刊 2020/6/11 総合・社会】

医療系ベンチャー企業「エルピクセル」の元役員・志村宏明容疑者（45）が29音田横領の疑いで逮捕。着服した金のほとんど全てを私的な外国為替証拠金取引（FX）に使っていたという。「会社の資産運用の一環としてやった」

2017年4月に入社してすぐ財務や経理を担当し、送金を始めた。元役員はネットバンキングのIDやパスワードを1人で管理していた。同社の口座から自分の口座に二十数回にわたった送金していた。通帳の送金記録の写しを改ざんするなどして発覚を遅らせたという。19年12月に本人からの申告で発覚。】

「エルピクセル」は東京大大学院発のベンチャー企業で、人工知能（AI）を使った画像解析による医療診断支援システムを開発しているというけれど、人を見る目（人物を解析する）は持たなかったようだ。

この男は経理を担当する役員の待遇で「エルピクセル」に迎え入れられ、財務や経理の責任者を任された。それまでの他社での実績があり、有能ぶりが知られて

おり、即戦力として期待されていたことだろう。引き抜かれての入社だったのかもしれない。ネットバンキングのIDやパスワードを1人で管理させるほど、彼の信用力は高かったのだろうか。

そうであっても、会社の財布をまるごと預けるようなことは、あまりにも冒険的（ベンチャー）過ぎる。

入社したてのルーキーを、会社の金に個人的に手を付けても誰にも知られない立場に抜擢したのは、経営最高責任者（社長）としては、甘すぎる判断だろう。

任命責任が問われそうだし、管理体制ができていなかった。人材を寄せ集めて設立したようなベンチャー企業にありがちな落とし穴だったかもしれない。

バックアップの意味でも、IDやパスワードは他の役員とも共有する必要があったし、会計監査では、その口座を直接アクセスしてチェックする必要があった。その入出金に関しては、その役員がプリントした写しを見せていたという。そんな紙の上の数値など、偽造しようと思えば、パソコン上でいくらでもできてしまうから、他人は見抜けない。それは彼にとって、手馴れた作業だったかもしれない。

その元役員は「会社の資産運用の一環としてやった」と、へたな言い訳しているが、会社の資産運用ならば、

儲けた分はどう報告しようとしたのだろうか。報告しようものなら、裏でコソコソやっていたことがすぐばれてしまう。課税の対象にもなる。〈儲けが出たのなら、ぜんぶ自分の懐に入れる〉魂胆がありだ。

どうやって「運用していたか」というと、元役員はFXをしていたのだ。それは、為替相場の変動で差分を損益とするものだ。通貨を売ったり買ったりしているだけのことだ。為替相場の予測は難しい。予期しない国際関係に影響を受ける。元手にした金額の何倍かの利益が上がることもあれば、損することも大きい。FXに資産としての価値があるとも思えない。FXは、運用や投資にほど遠い、投機にちかいものだろう。

「運用していた」などと言うのは、おこがましい。FXという「マネーゲーム」の元手として会社の金を流用していた、と言うべきだろう。たとえ、一時的に儲けても、通貨を売ったり買ったりするのだから、その分の手数料は取引した会社に着実に取られる。つまり、利益は目減りすると思わなくてはならない。

この男は、結局、会社から引き出した金の大半をすってしまったわけだ。もう取り返しようないほどの損をしたから、自分でその横領を申告したのだろう。それはいずれ、必ずわかってしまうことだ。何時ばれ

るかという不安に耐え切れなくなつて、告白したものでしょう。それは良心の呵責でも誠意でも何でもない。ギブアップ宣言しただけのことだ。

彼は有能な経理担当どころか、会社の金と自分の金の区別をつけられないような、とんでもない「博打打ち」だったわけだ。役員なら、それなりの高額な報酬をもらっていたはずだが、FXにつき込む金はそれだけでは足りなかったことになる。あるいは、自分の金でなく会社の金だから、はでに使い込めたのかもかもしれない。

⑧ 架空請求で1億円を振り込んだ70代女性

【読売新聞朝刊 2020/6/11 社会】

神奈川県・厚木市の70代女性、毎日電話で振り込みを要求され、現金約1億1800万円と電子マネー30万円分を騙し取られた。女性は、身に覚えがないオンラインゲームの利用料金の支払いを迫られるなどした。2月29日に女性のスマートフォンに「ご利用料金の支払いが確認が取れない」などと書かれたショートメールが届いた。以後毎日、4月18日までの1カ月半余りの間に計74回、現金を振り込まされていた。男らと連絡が取れなくなったことを不審に思い、今月6

月、知人の弁護士に相談し、発覚した。」

架空請求の振り込み詐欺としては、おそらく史上最高額の被害だろう。現金を振り込んだ回数も多い。74回だ。1回当たり平均100万円以上を毎日のように振り込んでいた計算になる。

毎日電話で振り込みを要求する詐欺集団のずうずうしさは、たいしたものだと感心してしまう。そうとう演技と話術が巧みだったことも推察される。1回だけ、あるいは前回までの入金では足りないという理由付けは難しいだろう。だが、この詐欺団は女性を納得させるだけの理由を考え、毎回手を変え品を変えてでっち上げていたのだろう。

一度悪事が成功したとき、二度目は警察に通報されるかもしれないから、用心しなくてはならないが、この詐欺集団は、盗れるだけ盗ろうと、欲の皮が突っ張っていたとみえる。何回も繰り返しているのは、ほとんど博打をしているようなものだろう。いつ「ドボン」が来ることを知ってのことか、知らずか……。

彼らは、毎回、振込先口座番号を変えたりして、用心していたかもしれない。あるいは、口座が凍結されるまで、同一口座を使い続けたか。その方が女性に怪

しまれないから……。

受け子はATMの前でその口座から引き出す時、帽子を深くかぶり、マスクをしていたことだろう。防犯カメラで写されていることは承知していた。そして、いつ口座が凍結されるのかもわからず、後ろに刑事が立っているかもしれない。

70代女性がそんなに現金を振り込んで、銀行の職員が怪しんだと思うのだが、彼女は「お得意さま」の一人だったのだろうかと私は想像してしまう。彼女なら高額振り込みをしても不審に思われないという人物だったかもしれない。

とはいえ、詐欺にあつた人は、発覚後、周囲の人々から見下され、バカだの何とかだのと言われたに違いない。「そんな余分な金があるなら、詐欺集団にばらまくより、慈善団体に寄付すればよかったのよ」となじる声が出そうだ。彼らの本心は（私にくればよかったのよ）

警察からは「被害届を早く出せ」ときつく言われ、詳細な事情聴取を受けただろうし、新聞記事になるくらいだから、複数のマスメディアの記者に取材された（あるいは取材を申し込まれた）に違いない。

この女性には弁護士の知人がいて、最終的な振込み

の約半月後、その人に相談したことで事件が発覚したわけだ。結果論で言えば、その知人は前もって女性にアドバイスしておくべきだった。「あなたなら、きつと振り込め詐欺に狙われますよ。詐欺グループは、メッセージや電話の声では姿が見えないものだから、警察官にも銀行員にもなりすましますよ。彼らは、もつともらしい理由をつけて、あるいは何かしらの請求をして、せかすようにお金を振り込めと言ってくる。基本的に金の支払いで電話で対応してはダメ」「いいね、せかすようにお金を振り込めと言ってくるのは、やつらの手口なんだ。他の人と相談するような余裕を持たせないように、せかしてくる」

私は（バカだの何とかだの）とは言わない。彼女は他人を信じて、自分の損を顧みず、毎日お金を持って銀行に行き、せつせと振り込み手続きをしたわけだろう。純真な人だ。自分を「世の悪」が狙っているとは決して思わない。他人様よそさまが自分をだますとは思わない。世の人々はみな、親切に言ってくれるのだ。あの人たちだって、（支払いが滞納になったら、司法手続きになる）などと警告・忠告してくれたのだ。

金の中から他人の話を疑わないような人は今時、まれだろう。私など、多くの人に不審者だと思われてい

るから（半分冗談）、こんな人に出会ってみたい。もちろん下心はないつもり。

⑨ 本庶氏と小野薬品のこじれた関係

【毎日新聞朝刊 2019/7/27 社会】

本庶氏、オプジーボ特許を巡り小野薬品を提訴する方向へ。本庶氏は2006年、薬の売上高の0.75%前後を特許の対価として受け取る契約を結んだが、「正確な説明で、信じられないほど安い額で契約した」

【読売新聞朝刊 2020/6/20 社会】

本庶氏、小野薬品を提訴した。226億円の支払いを求める。オプジーボ薬開発の対価で産学対立。口約束で契約成立かが争点。

14年には、青色ダイオードの発明で、中村修二氏と勤務先だった製造メーカーとの間で同様なトラブルが起きていた。この時は和解が成立した。】

ノーベル賞受賞者・本庶佑氏は、去年（2019年）7月の頃から小野薬品を提訴するといきまいていたが、話し合いがまとまらなかったのだろう、とうとう本堂に提訴した。

本庶氏は、オプジーボ薬開発の対価について、言い

分を聞き入れようとしないう小野薬品に怒りまくっている。小野薬品が示している対価は、31億5000万円だという。本庶氏が要求しているのは226億円だから、まだ相当に開きがある。

本庶氏には「小野薬品にだまされて契約してしまっただ」という悔しい思いもある。本庶氏の言い分をわかりやすく、私の言葉で表現すると、

「コノヤローども、オレの発明のおかげでがっぽり儲けやがって、オレにも一部をよこせ！」

たとえ本庶氏に「オレは金もうけのために発明したんじゃない」という自負があっても、他者が自分の発明を金儲けの手段にしていたんでは、黙ってはいられないことなのだ。自分の発明が世の中の役に立つことはうれしい反面、企業の金儲けに使われることが許せない。

自分の貢献で、会社が儲けたことに対する分け前の権利を主張しなければ気がすまない。これは理性を超越した感情論だから、おめおめと引き下がるわけにはいかない。

「本来オレが儲けたはずのものが、便乗しただけの他人に儲けさせてたまるか」という、やっかみ的な感情や、権利を奪われたという被害者意識が沸き起こる。

そんな感情が渦巻くから、会社が決めた特許に関する報酬ルールなど、「クソくらえ」なのだ。

小野薬品が「弊社は知的財産を尊重している。正当な対価を支払っている」「この利益は、社員全員が働いて積み上げたもの」などといくら説明しても、本庶氏には通じないのだろう。

（テメーら、また、ごまかそうとしているんだろ）

本庶氏だけでなく、青色ダイオードの中村修二氏の場合もそうだった。対価の正当性で争った。産業的に儲かる発明をした者は、それを利用した企業が儲かることに我慢がならない。自分が金儲けのチャンスをしたという悔恨がこみ上げてくるし、他人がやすやすともうけていることに嫉妬する。

つい「分け前をオレによこせ！」と言いたくなる。

⑩ 香川ゲーム条例・パブリックコメントの怪しさ

【朝日新聞朝刊 2020/4/14 社会

全国で初めて子どものゲーム利用時間を定めた香川県ネット・ゲーム依存症対策条例で、条例可決前に実施されたパブリックコメント（パブコメ、意見公募）に寄せられた「賛成」の多くが、同じような文言だったことがわかった。朝日新聞が情報公開請求で、その文言

を入手し、集計した。県議会事務局が3月に、条例への賛成が2269件、反対が401件あったと公表した。(情報公開請求で)開示された文書は、ほとんどが電子メールで、送信者の住所や名前は黒塗りにされていた。「賛成」のものは、ほとんどが「賛成します」「賛同します」とだけ書かれていた。その直前に(理由が)同じような表現で書かれていたものが100件以上の単位で数種類あった。

条例は、18歳未満によるゲームの利用時間を1日当たり60分(休日は90分)などと定める。罰則はない。パブコメは1月下旬から15日間実施され、条例は3月に可決した。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/15 社会

香川県ゲーム条例、パブリックコメントで賛成意見は特定PCから、と判明。ご意見箱では送信者のアドレスはわからないが、大量送信のUA(ユーザーエージェント)が4種類ある。県議会事務局は、取材に対し、「同じUAでも同一のパソコンを示すとは考えていない」としている。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/16 社会

香川県ゲーム条例、パブリックコメントで複数の賛成意見に同じ誤字が見つかった。】

ゲーム依存症対策で、香川県が規制する条例を定めたのは、先進的なことだ。ゲームばかりしているような青少年に歯止めをかける一助となりうるもので、啓発的でもあり、なかなかのものとして評価したい。でも、パブリックコメントでケチがついてしまった。

これは、いわゆる「組織票」だろう。組織の構成員5、6名を動員して、票を積み上げたものと考えられし、同一人物が、氏名を偽って、同じ内容のコメントを寄せた可能性が高い。その得票数には妥当性を欠くことになる。賛成票の中にそれが多かったというのは、不思議なことだ。このパブリックコメントの場合、賛成票が、反対票の約5倍以上に多かった。

議会で条例を採決したとき、議員の中には、パブリックコメントを参照し、その賛成の件数がそれだけ多いなら、賛成票を入れようと考えた人がいたかもしれない。でも、パブリックコメントの公募では、投稿したい人だけが投稿するものだから、アンケートのように賛否の割合を統計で示す数字ではない。

朝日新聞の記者が、その賛成の件数が不自然に多い、と思ったのだろう。不正の匂いをかぎつけたのだ。そんな条例のパブリックコメントでは、積極的に賛成す

るケースは少ないものだろう。つまり、条例のままではよいなら、文句はないから、パブリックコメントなどわざわざ出さない。それに対し、疑問や異論を持つ人や「この程度の規制では不十分ではないか」と不満を持つ人が、積極的にパブリックコメントを寄せてくるものだろう。だから、どうしても反対票が多くなる。この場合、ゲーム業界の関係者が反対意見を寄せたかもしれない。

しかしながら、条例を施行する県側としては、「反対が多くては困る」のだろう。つまり、多くの人に支持された条例であってほしいと考える。反対ばかりのパブリックコメントが集まっては、体裁が悪いのだ。

つまり、このあやしい結果は、パブリックコメントを主導した県の当局によって、水増しされたと考えられる。そんなパブリックコメントの結果を賛成側に持つていきたいというモチベーションがあるのは、県議会だけだ。

率直に言って、どうでもいいようなパブリックコメントの集計だから、それは軽い気持ちで、担当部署内で補正作業が行なわれたのだろうと私は推測する。パブリックコメントを公募するのは、条例を施行するための手続きとして行なうもので、ほとんど形だけのもの

のであり、集まった意見は参考意見程度の取り扱いだろう。しかし、行政のごまかしが大嫌いな朝日新聞がかみついて、追求したわけだ。キャンペーン記事にした。香川県議会事務局が懸命にその追求から逃れようとしている図になっている。

怪しい賛成コメントを発信した人の名前や住所がわかっていいるのだから、調べようと思えば、すぐわかりそうだが、隠し通したい香川県議会事務局がすんで調べるわけではない。同一のパソコンから発信されたとわかっても、複数の人が一つのパソコンを共有していたのかもしれないなどと言い逃れするのだろう。

彼らはこのような補正作業をこれまでにもやっていたのかもしれないが、今後は、朝日新聞が目を光らせているから、少しは控えることだろう。

⑩ エネルギー庁決算文書改ざん

【朝日新聞朝刊 2020/4/10 総合3】

エネルギー庁文書に虚偽6カ所、関西電力に出す業務改善命令に関する決裁文書約80枚で、日付を偽った事前に必要な電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取を忘れ、実際には命令後に行ったにもかかわらず、その日付を前日の15日と偽って記述した。複数の部

署の官僚が目を通しながら、不正を見抜けなかったものとみられる。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/11 総合3】

エネルギー庁虚偽文書、報告を受けた幹部は是正指示せず黙認。衆院計算委員会で一連の経緯を説明した。不正の報告を部下から受けた上司が黙認していた。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/16 総合2】

経済産業省・資源エネルギー庁でのうその公文書、外部の人がこの命令に関する公文書の情報公開を求めたことで明るみに出た。】

【朝日新聞朝刊 2020/4/18 経済】

経産省偽りの公文書。4月3日の衆院経産委員会で、虚偽公文書作成問題に批判が集中した。野党の今井雅人氏「手続きを間違えたから、隠蔽している。めちゃくちゃ悪質。こんな人（梶山弘志経産相を指す）に行政を任せられるか」

経産省は3月31日、不正にかかわった、虚偽の公文書作成を指示した課長級職員を戒告にしたが、他の6人は省の内規に基づく処分にとどめた。人事院の指針には「免職または停職」とあるが、それとはかけ離れた内容だ。】

経済産業省が関西電力に出す業務改善命令に関する決裁文書に虚偽があったとして、国会で野党が追及し、騒ぎになった。

虚偽というのは、日付を偽ったことだ。経済産業省・資源エネルギー庁の職員が決裁文書作成の際、電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取した日付を、正しくは16日と記すべきところを、意図的に15日と記したことだ。

16日ではまじかかったのだ。それでは、関電に業務改善命令を出した後に、電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取を行なったことになってしまう。

電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取が必要だったことは、あとから気づいたことになる。本来は、決済前に意見聴取をしなければならなかった。職員たちはあわてて、16日にそれを実施したわけだ。いわゆる手順前後だった。

業務改善命令を一旦取り消す方法があったと思う。しかし、関西電力に出す業務改善命令を出す期限も限られていた。電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取をしてから、改めて決済するようでは遅すぎるという事情があった。そこで職員たちは、電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取を15日にする方法を取っ

た。意見聴取を15日とすることを決めたのは課長級職員であり、公文書作成にかかわった6人の職員は、その指示に従った。

電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取は、形だけの手順として実施されたのだろう。手順として必要だったが、本場に必要ない作業項目だったかについては疑問のあるところだ。それをパスしては、電力・ガス取引監視等委員会の存在意義がなくなるのだろう。要は、電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取は、〈どうでもよいこと〉だったと推測される。

15日の日付にすれば、決済文書の形が整う。矛盾がない。電力・ガス取引監視等委員会の顔を立てられるし、そして監督省庁として、職務を果せる。あの「高浜町の元助役」を中心に原発マネーを食い合っていた関電に業務改善命令をたたきつけてやれる……。

電力・ガス取引監視等委員会への意見聴取を忘れたのでは、示しがつかないことだろう。当日、それが必要なことを思い出し、迅速に済ませた。手続きとしてすべて完了した。しかし、その日付だけが、当日でなく、前日の数値であればよかった。前日であれば、一番体裁が良かったのに……。

つじつま合わせのささいな「機転」を働かせた。〈そ

んな日付はだれも見ちゃいない〉のだ。彼らは業務改善命令を出す仕事を完遂したのであって、完璧ではないにしろ、有能な官吏たちだろう。私としては、その手順前後は大目に観たい。15日だろうと、16日だろうと、大勢に影響ないことだ。

野党議員が言うように「めっちゃくちや悪質」などとは、私には思えない。日付の間違いを指摘するのは「重箱の隅をつつく」行為であって、政権側を迫及するための「落ち度探し」だろう。それを見つけたとき、彼らはほくそ笑んだことだろう。しかし、それは裏の表情であって、ひそかに隠す。

野党やマスメディア（特に朝日新聞）は、顔をオニにして、そんなささいなことで、「ナニ、エネルギー庁の役人どもが公文書を改ざんした？ トンでもないことじゃないか」などと声高に叫ぶ。大臣の監督責任を追求したいのだ。詰問によって、回答者が下手な言い訳すれば、彼らはさらに嘔みつく。

かれらには、改ざんイコール悪質、という概念で凝り固まっているところがある。役人たちはもつと柔軟に考えていた、と私は推察する。